



Title	型染めによる《涼のしつらえ》
Author(s)	梅崎, 瞳
Citation	デザイン理論. 2016, 67, p. 104-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56301
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

型染めによる《涼のしつらえ》

梅崎 瞳／大阪芸術大学

作品のテーマを《涼のしつらえ》とし、型染め4点の作品を構成した。その内容は、テーブルクロス(240×150センチ)、テーブルセンター(250×20センチ)、3点の団扇(各21×31センチ)、明治時代に出版された『波紋集』を写本・再構成した和綴じ本(30×20センチ、総82頁)である。いずれも波の紋様を全体に配置して、海の中の様子を表現したものである。涼を感じられる「用」のあるものをセットし、視覚だけではなく、涼を自ら体験してもらいたく「しつらえ」た。

テーブル全体を、テーブルクロスで覆い、そこにテーブルセンターを重ねた。双方とも型染めで波／海を表現している。布のテクスチャと透明感を引き立たせようと、木綿地のテーブルクロスに麻地のテーブルセンターを重ねた。2枚を重ねることによって海の深さを表現しようと、紋様には同じ染め型を用いて、ちょうど紋様が一致して重なるように位置を合わせて染め、その2点を重ねた。テーブルの前に座ると、眼下に海がひろがるように構成している。また、テーブルクロスとテーブルセンターには敢えてオレンジ系統の色彩を用いた。《涼》といえは寒色系の色が思い浮かぶが、それではあたりまえになりそうなので、暖色系ととらえられそうな色彩でもなんとか《涼》が表現できないかと工夫した。また暖色系の色彩を基調にしたのは、テーブルは食事するところでもあるからである。食堂では寒色系は避けられ、暖色系が用いられる。それは寒色系よりも暖色系の環境のほうが食欲をそそるからだと考えられるからだ。《涼》を感じつつ、おいしく食べられ

るようにと、暖色に寒色も少し用いて、涼しさと温かな日差しを同時にイメージした。

テーブルには、団扇と冊子を配置した。団扇を用いつつ、写本を紐解いてもらおうという意図である。団扇の型はすべて同じ型で制作、同じ型でも、トリミングや色で違うイメージの団扇を制作。それらをガラスのアイスペールに立ててテーブルセンターの上に配した。アイスペールはややクラシックでシンプルなアメリカの骨董品である。冊子は、『波紋集』を写本した和綴じの本である。原本は、森雄山著『波紋集』の上・中・下3分冊(山田芸艸堂、明治35年出版)である。そこには合計415点の波紋が掲載されている。そのすべてを自ら筆ペンで和紙にトレースして、3分冊を一冊にまとめて和綴じした。表紙には独自の波紋を型染めした自作の布を用いた。

原本の『波紋集』にはじつに多様な波紋が収集され掲載されている。日本に多様に発達した波紋の例は世界では珍しく、欧米では流水紋・波紋・波頭紋・波濤紋など水の表現がきわめて少ない。この日本でゆたかに展開した水の表現を理解したく、写本を試みたもので、それは大海とクジラをモチーフにしている私にとって貴重な参考になるからでもある。ゆたかな水の表現を紐解いてもらうことが、『涼のしつらえ』の要素になると考えて、テーブルの上にその冊子も配した。

型染めの涼やかな表情は《涼》の表現に適応するのではないだろうか、その型染めにより「用」のある四種のものをしつらえ、型染め(眼)と、布や風(皮膚)と、読書(行

為)とで、《涼》を体験してもらおうとした「しつらえ」である。

これまで型染めのタブロー（壁面展示作品）を中心に制作してきた私にとって、今回の「しつらえ」や、用のある作品制作は、あらたなとりくみとなった。平面で考え、頭に浮かべるイメージだけの感覚と、物を実際に手に取り感じる時の感覚と美しさは、異なる。実際に触れ感じる感覚など、五感による総合的な良さを「しつらえ」によって引き立たせようとした。

今回私は、研究発表とパネル発表の双方に参加した。研究発表では「巨大な一枚型の染色」について論述するとともに、長さ6メートルの自作実物作品を会場にもちこみ、巨大な一枚型による型染めを紹介した。巨大な型

をめぐして制作してきた私にとって、長さ6メートルの作品は比較的小さなもので、長さ12メートルや、18メートルの作品もあるが、それらは会場にもちこむには大きすぎたので紹介することはできなかった。

研究発表とパネル展示の内容は、作品の大小、用の有無、壁面展示としつらえ（インスタレーション）と相違するが、一枚型による染色と水の表現が共通している。双方の発表で、一枚型による染色についてのとりくみや、その意義についての理解をふかめようとした。

型紙を刀で彫り、手で染めるという、型染め技法を用いるのは、自身のイメージや感情が、技法やプロセスを通して作品となることである。そのことによって、画面にデザインするだけでは生まれない世界が現れると考える。

